

優しさではなく当たり前を目指して。

修士1年 前田優子

「人に優しいまちづくり」という言葉をよく目にする。その言葉を見ると身体障害者の人たちに住みやすい町、日本になっているかのような錯覚を確かにする。

私も、そう思っていた。

母が持病の悪化と重なり腰を痛めて、歩行困難となり、車椅子を使用する生活になる前のことだ。ところが、椅子を押す介助者となることで、町、物が、身体に不自由のない人の目線で作られていることを実感した。車椅子で一歩外に出ると、途端に立ち往生（車椅子なのでこの表現は性格でははいが）してしまう。

普段、何の問題もなく歩いていく近所のスーパー。歩道は、狭く凸凹しており車椅子での通ることは、厳しい。通院している総合病院では、車椅子トイレの表示がなく探し回り、やっと見つけても外来等に1箇所しかなく、すぐには入れない。

外来で診察を待っている間、椅子のスペースがなく、「通路をふさいでいる元凶」のようにあっちにこっちにと移動させられる。建物に入ろうにもエレベーター設置がなく断念することも多かった。唯一買い物できるのは、バリアフリーの大きなショッピングモールであった。買い物行きたい。髪を切りたい。外食に行きたい。母の普通の願いを叶えるのにとっても苦労した。

この体験から、身体に障害があり、車椅子を使用している人たちの不自由さを考えるようになった。住みづらさ、生きづらさを痛感した。

母の車椅子生活は、半年ほどで終わった。だが、障害を持ったことで日常をすべて車椅子での生活を送られる人たちにとっては、『生き方』にかかわる大変な問題だ。

使えなかったのが使えるようになったのが優しいのか？

「やさしい」と呼ぶことは、障害のある人には他の人より低いレベルを当てていることであり、社会が二重の価値基準を認めていることではないか？

川内さんの言葉が重くこころに響いた。

障害者の権利・尊厳を守る障害者差別解消法ができて「合理的配慮」という一文字で身体に不自由がない人目線での社会が当たり前のようにとおってしまう日本。

諸外国の設備のよさ、その設備があたり前のこととして成り立っている現状を知って、日本がこの先どう変わっていくのか、表層レベルでの優しさでない一人ひとりを大切にするまち、国づくりにしてほしいと考える。

誰でも夢や願いがかなうことが特別なことではない、当たり前になるよう変わっていけるように。

私自身も声を上げていきたい。

